慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

3号館南棟ついに完成

南棟本格稼働に向けた大いなる第一歩

病院長　武田　純三（麻52回）

平成24年7月7日（土）、3号館南棟の内覧会ならびに懇親会が開かれました。当日は清家篤塾長を始め、北里一郎塾評議員、川澄俊文東京都福祉保健局局長、野中博東京都医師会長、比企能樹三四会会長、松本純夫関連病院会会長他、200名を大きく越す招待者に参加頂きました。無事に会を終了することが出来ましたこと、紙面をお借りして、御礼申しあげます。また、多大なご支援を賜りました故 上野八夫様、故 加藤俊男・智恵子様、森堂様、久光製薬株式会社様に、厚く御礼申し上げます。

3号館南棟は昨年の2月に工事が始まり、東日本大震災があったにもかかわらず、予定通り本年4月25日に竣工式を取り行うことができました。その後医療器械を搬入し、許認可の申請や査察を受けて、現在8月の開院を目指して最後の準備に追われております。新棟と言われてきた2号館も既に四半世紀が過ぎ、老朽化が始まっている中、25年ぶりの臨床・病院の建物が建つことになり、待ちに待った建物が完成したことになります。また、3号館は北棟が昨年1月に竣工し、今回の南棟の稼働で、旧別館跡地の建替え計画が終了いたします。

慶應義塾大学病院には、この先二つの事業が残っております。一つは、南棟の稼働とその運用内容の充実です。これまでも繰返し書いてきましたように、3号館南棟には予防医療センター、免疫統括センター、リハビリテーション科の他に、5階、6階には1号棟にかわる特別病床の病棟が配置されます。

3号館南棟のパンフレットには、「早期発見・早期治療～包括的な先進医療の提供と予防医学の実践～」と書かれております。福澤精神と北里博士の教えを今一度振返りながら、現代における『先進医療と予防医学の実践』の場として、この3号館南棟を位置付けしております。ここでの『早期発見・早期治療』は、一般的に言われる、早期発見、早期治療に加えて、現代の要求に応えられるような、迅速での精密な検査と、短期間での治療開始をも意味しており、現在よりもワンランク上の医療技術と、ワンランク上の医療サービスの提供を目指しております。

もう一つの事業は、現在の6号棟、7号棟、中央棟北側を取り壊して、その跡地に新病院棟（1号館）を建設する作業です。既に基本計画と、建替えまでのローリングの基本案は最終段階に至っており、寄付のための活動に入る段階となっております。この新病院棟で行う次の時代の診療内容は、3号館南棟で展開する医療の延長線上にあります。3号館南棟で行う事業は、この先の新病院棟で行う医療の試金石となるもので、現在残されている二つの事業は、一つに結びついていると言えます。

今回の3号館南棟の内覧会は、これから始まる南棟の業務稼働に向けての前奏曲であり、南棟の運営は新病院棟建設に向けての第一楽章となるものです。その意味で、今回の内覧会は、慶應義塾大学病院にとって重要な意味を持っております。

完成した南棟正面玄関。ここが先進医療と予防医学の実践の場となる

原発事故の影響が色濃く残る南相馬
医療再興の現状と課題

亀田メディカルセンター　原澤　慶太郎（83回）

塾の皆様に於かれましては、ますますご清栄のことをお慶び申し上げます。千葉県鴨川市にあります亀田メディカルセンターの原澤慶太郎（83回）でございます。昨年11月より、福島第一原発から23㎞地点にある福島県南相馬市立総合病院に出向し、常勤医として仮設住宅の医療支援ならびに地域医療の再興に従事致しております。あらゆる事象に原発事故が暗い影を落とすこの地で、その問題解決の難しさを感じながらも、日々目の前の方々の診療に当たっています。

原発事故収束を謳うStep2が宣言され、20キロメートルの警戒線が解除された今でも、答えのない問題を抱えながら、この街に4万5000人の人々が暮らしています（震災前7万1000人）。ホールボディカウンター（WBC）の導入により、食品に留意することで内部被曝線量は増加しないことが示されました。しかしながら若い世帯だけが県外に避難したことから家族は離散し、作付けや漁を禁じられた多くの一次産業従事者は生きがいを失っています。こどもたちの帰還率は4割以下ですが、中には県外でいじめにあって戻って来たケースもあります。またひきこもりによるADL低下や孤独死の問題が、現実味を帯びて来ています。避難による看護師不足も深刻で、すべての病棟の再開には至っておらず、救急医療は崩壊しつつあります。

後輩の坪倉正治医師から連絡があったのは2011年夏の終わりでした。4月から東大医科研より出向し南相馬に入っていた彼とは、亀田メディカルセンターでoben/nebenの関係でした。地域医療崩壊のSOSを受けて入った現地で見たのは、見渡す限りの仮設住宅とそれに追いつかない医療インフラでした。短期の医療支援はこれまでもなされていましたが、中長期的なvisionのある支援が必要と感じ、別表の如く計画を策定し、理事長に長期の赴任を申請しました。2カ月かけ外来を整理し赴任、100日目までにPhase 1に当たる喫緊の課題が解決できるよう、集中しました。仮設住宅での感染症予防を第一に捉え、クリスマスまでに集会所でのべ2000名にインフルエンザ、肺炎球菌の予防接種を施行、高血圧緊急症の抽出も行いました。精神科入院診療の再開には、塾ゴルフ部の先輩である澤温先生に大変ご尽力頂きました。

赴任後6カ月以内に仮設住宅2500世帯の全戸訪問という形でPhase 2の現状評価、地域診断を行い、frail elderyの抽出、家族の離散状況を把握しました。半数近くの世帯で家族が離散し、高齢者が仮設住宅に残されていました。赴任から6カ月目にあたる本年4月、ようやく在宅診療部設立に至りました。現在医師3名の体制で、往診業務と入院緩和医療にあたっています。今年度中には特措法に則って申請した訪問リハビリステーションも稼働する予定です。

原発事故に伴う諸問題について、私たちがどのようにしてこの困難な課題を乗り越えて行くのか、いま世界が注視しています。低線量被曝の問題に関しては、継続的な内部被曝検査、家屋周辺の定期的除染、流通網末端での全食料品の線量検査が必要です。とくに小売店での検査は、風評被害を解消する唯一の方法と考えます。現在、福島県内ではこういった体制ができつつありますが、hot spotの局在化が進む周辺県や、高線量区域を水源とする河川の河口地域では体制が整っておらず、警戒が必要です。

また有史以来の未曾有の高齢化社会、いわゆる2025年問題が叫ばれて久しいですが、世界もまたglobal agingへと突き進んでいます。私が外科医を辞め、家庭医療の世界に入った理由でもあります。私どもの掲げる高齢化社会でのmissionは、衣食住、排泄が確保された上で、複数のcommunityに属し「生きがい」を有することです。この考えを核に、医療介護の連携を図るとともに、リハビリや新たなcommunityの創成にも力を入れています。またAdvance care planningの考え方を導入し、蘇生、胃瘻などの意思確認を進めています。急速に高齢者が増加し、医療従事者の拡充が望めないこの地においては在宅医療のあり方も検討が必要です。医療ニーズが高い方に必要な医療資源を届けるためにはICTの更なる活用が求められます。

高齢化率が1年間で33%に跳ね上がった南相馬。そこに広がっているのは、20年後の日本の姿です。裁量権を付与されたために生じたcommunityの分断に、失業、義捐金、賠償などの金銭的問題が絡み混乱は拡大しています。地域医療が抱えるさまざまな社会的問題に対して、未来志向の提言を行い、solutionを模索する取り組みがいま必要とされています。

南相馬での診療風景

小高区は今も震災当時と変わらぬまま

Tactical	Solution
Phase 1	Urgent issue
Phase 2	Screening, Assessment
Phase 3	Action, Intervention
Phase 4	Patient advocacy

予防医療センター開設
最新鋭診断機器による人間ドックで「健康寿命の延伸」に取り組む

予防医療センター長　杉野　吉則（54回）

来る8月1日から慶應義塾大学病院予防医療センターが開設され、人間ドックを開始いたします。予防医療センターは当初、義塾創立150年記念行事の一環としてPETを中心とする施設として計画されましたが、世情の変化にともなってその内容も大きく変わり、本年四月に竣工した3号館（南棟）の3階の約2000平方メートルにおいて業務を行います。

南棟の建設や予防医療センター開院については、多くの皆様からご厚志を賜り御礼申し上げます。その中でも、とくに予防医療センターの設立にご支援を賜った森章様、人間ドック検査項目の一つであるPET―CT装置を有する核医学部門（2階）にご遺産を寄付していただいた放射線科故加藤俊男教授ご夫妻、信濃町キャンパス施設充実のためにご協力いただいた久光製薬株式会社様、医学部・病院の施設を充実させるためにご厚志をいただいた上野公夫様に心から感謝申し上げるとともに、皆様の熱い思いに応えられますように予防医療センタースタッフ一丸となって務めさせていただきます。予防医療センターの計画や準備の段階で塾ならびに医学部・病院の多数の皆様方に多大なご尽力やご協力を賜ったことについても、あらためて御礼申し上げます。

開設された予防医療センターでは、21世紀にふさわしい医療のあり方、高齢化の進展に合わせた「健康寿命の延伸」という課題に取り組んでまいります。「人間ドック」としては、最新鋭診断装置を導入し、熟練した医師や技師を配備して、より精度の高い健診を行います。診療についての詳細はすでにご案内しておりますのでここでは省略させていただきますが、お時間がございましたら是非ドックを受診していただければ幸いです。また、ご見学して頂いて、ご家族やお知り合いの方々にご紹介下されば考えております。

人間ドックの内容ですが、標準的なドックに加えて専門ドックを設置させていただきました。これは、臨床各科からの多大なご協力によるものであり、非常に充実したものとなりました。受診予約の状況から見ますと、専門ドックへの期待の大きさが実感されます。そして、標準ドックと専門ドックを合わせて受診していただくことによって、三大生活習慣病（がん、心臓疾患および脳血管疾患）の早期発見だけではなく、加齢に伴う様々な疾患にも対処することが可能となりました。さらに、予防医療センターとしてはこのような診療面の充実だけではなく、受診後の経過観察や生活指導・食餌指導についても受診者のニーズにきめ細かく対応できるようなシステムを目指しております。

慶應には長い歴史を持つ慶應健康相談センターがあり、多くの方が受診されていましたが、建物や設備の老朽化のために平成20年3月に閉鎖しました。また、その6年前にはがん検診を行っていた慶應がんセンターを閉鎖しております。本院では高度先進医療など専門性を持った診療を行なっておりますが、このような医療を推進していくためには、その対象となるような患者により多く来院していただかなければなりません。そのためには、院内に独自の健診施設を持ち、より多くのみなさまに受診していただくことが必須と考えられます。さらに、今回「人間ドック」を開始することによって、3号館5・6階に設置される個室病床に入院して高度先進医療を希望されるような患者を増やすことも目的の一つと考えられます。そして、予防医療センターや南棟5・6階の病床をより多くの方にご利用いただくことは、医学部創立百年記念として計画されている新病棟（一号館）の建設に大きく寄与するものと考えております。

予防医療センターは大学病院の一部門ですので、当然のことながら、予防医学研究の拠点にならなければなりません。しかし、いきなり新たな研究を行うことは不可能であり、まず、多くの受診者に来院いただき、その後も継続的に受診していただくことからはじめさせていただきます。受診された方の正確なデータをしっかりと管理して、ご協力いただいている各科の先生とともに解析していくことが研究に繋がっていくと考えており、そのために受診者に継続して来院していただけるような環境とともにデータ管理のシステムを整えて参ります。

3号館（南棟）は、慶應義塾大学病院にとりましては25年ぶりに作られた病棟であり、同時に数年後に計画されている新病棟の運営を考える上で、モデルケースとして位置付けられます。例えば、予防医療センターは従来の病院業務とは様々な面において、その運用が違っています。対象が患者ではなく健常人ですので、接遇には十分に配慮しなければなりません。しかし、このような接遇への配慮は、予防医療センターに限られるものではなく、本来なら本院でも行われるべきものです。予防医療センターでは接遇教育についてもいくつかの試みを計画しておりますので、これを3号館、さらには本院にも広めていきたいと考えています。

開院まで1ヵ月を切りましたが、まだ準備すべき事項が多くあります。お陰さまで、予約は8月～10月については8割程度埋まっております。しかし、現在、受診を希望されている皆様は、以前から慶應健康相談センターを受診されていた方や慶應大学病院に愛着を持たれた方が多数を占めると考えられ、必ずしもこのような予約の状況が続くとは楽観しておりません。そこで、私共も広報活動を地道に進めて参りますが、先生方も受診者のご紹介の程、何卒よろしくお願いいたします。

予防医療センターの運営にとりましても、本院において予防医学の研究を行う上でも、初年度に受診していただいた方に好評をいただき、さらにそこから口コミによって受診者が増加することが今後の命運を決めるものと考えており、スタッフ一同全力を注いでまいりますので、皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

メインラウンジとレディースラウンジ入口

人間ドック受付カウンター

慶應義塾大学医学部三四会
平成24年度定例評議員会

6月16日（土）の午後2時から4時30分まで、新棟11階大会議室において平成24年度定例評議員会が開催された。水野副会長の開会の辞の後、川城副議長が登壇し、出席者数78名、委任状数99名であり、評議員総数247名の過半数を超え、会則第20乗3項の定員数を満たし評議員会が成立することが確認された。その後まず平成23年度の物故会員97名に対して黙祷が捧げられた。比企会長の開会の挨拶に次いで、東日本大震災から約1年間における被災地に対する三四会としての対応につき説明がなされた。

議案については、第1号議案　平成23年度三四会事業報告（古梶理事）、第2号議案　平成23年度三四会会計決算（末岡副会長）、第3号議案　財産目録　会計事務処理並びに財産管理、監査報告（菅沼監事）の各議案について審議が行われ、承認された。

第4号議案　平成24年度三四会事業計画（案）（リー副会長）、第5号議案　平成24年度会計予算（案）（末岡副会長）がそれぞれ審議されいずれも承認された。第6号議案　評議員会活性化に関する議長提案について、古梶理事の議長代行のもと、川城副議長より評議員会活性化とくに若手評議員出席率向上に関しての改善策の検討の結果として、評議員会メーリングリストの構築などの提案について説明、審議され、承認された。

その後、末松医学部長から挨拶の後、呼吸器外科学教室における医療倫理指針違反についてのお詫びおよび再発防止策について述べられた。病院財務状況、3号館における免疫難病治療ユニット設立、医学教育および奨学寄付などの現状、医学部創立100年募金趣意書および新病棟建設に向けての現状、被災地救護医療の現状、第44回医学教育学会の準備状況などの話があった。

閉会の辞は末岡副会長により本評議員会における広い地域・年代の出席に対する御礼で締め括られた。

閉会後は隣室にて和やかに懇親会が催された。

三四会奨励賞の推薦について

目的
若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図ります。

◎対　象
1．次の各分野ですぐれた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設他大学、地域等で業績を上げている三四会員も含む）
2．対象となる分野
　イ、臨床医学
　ロ、基礎医学
4．満40歳以下

◎推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、他大学教授および慶應義塾大学関連病院会会員とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
3．推薦締切りは平成24年8月21日(火)必着、三四会事務局宛とします。
4．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴・業績目論等、論文別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、ともにコピー10セットが必要です。
5．対象となる研究が共著論文の場合は共著者の承諾書（コピー10部）が必要となります。

◎選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、約8名程度の受賞者を決定します。受賞者は平成24年11月2日に予定されている慶應医学会総会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。
※今年度より、「三四会社会功労賞」（後日公示予定）新設のため、従来よりの「ハ、地域医療、社会貢献または三四会活動等」の分野の公募は中止しました。よって、三四会奨励賞の受賞者は、「約10名程度」から「約8名程度」に変更になりました。

鑑賞和来

3号館南棟が竣工し、別館跡地の整備も終わろうとしている。5年後に迫った医学部100周年に向けて、この信濃町の変貌ぶりには瞠目すべきものがある。木造の学生ホール（旧三四会館）、食養研究所、薬化学研究所、そして別館と、戦前からの建造物がこの20年ほどの間に次々と姿を消し、残るは北里図書館と予防医学校舎のみとなった。

予防医学校舎玄関脇のスロープには、昭和20年5月24日未明の山の手大空襲で米軍機から投下された焼夷弾による圧痕が、今も左右一箇所ずつ残っている。長い歳月の間に摩耗した、一辺5センチほどの六角形の窪みがそれである。かつて別館の屋上にも同様の痕が多数見られたという。一坪に一発といわれる、この夜の容赦ない無差別爆撃により、木造の大学病院本館は全焼したが、泊まり込みの職員や学生による懸命の避難誘導、消火活動の結果、入院患者にひとりの負傷者を出すこともなく、冒頭に列挙した建物群が後世の我々に残された。

だが形あるものは、いつかその姿を消す運命にある。別館も戦火には耐えても、時の流れには逆らえなかった。落成から四半世紀を経た新棟が、今春から2号館と呼称を変えたこともまた、それを暗示している。3号館や、いずれこの信濃町に姿を現す新病院棟とて同じことである。病院と医学部、そしてその形骸たる建造物を時代に合わせて維持することのみでは、たとえ100年、200年の歴史があろうとも、それは単なる時間の経過でしかない。

福澤先生は、「一身独立して一国独立す」と説かれた。形骸に精神を宿らせ、真に受け継ぐべき伝統へと昇華させるためには、我々ひとりひとりが先人の気概を引き継ぎ、新たな道を啓いて行かねばならない。キャンパスのはずれに人知れず残る、この小さなふたつの六角形は、無言でそれを教えてくれている。

（精神・神経科学教室　冨田真幸　76回）